

# 東海の雄 名家今川家の栄光と没落

〳海道一の戦国大名〳へと転化した

足利一門の名家は、すぐれた軍事力、外交、  
領国経営に力を注ぎながら、なぜ滅んだのか？

室町幕府將軍、足利家の流れを汲み、駿河、遠江、三河を支配した今川家。  
守護大名から戦国大名へ進化した稀有な名家でありながら、  
桶狭間〳における今川義元討死以降は、没落の一途をたどった。  
戦国屈指の名家に斜陽をもたらしたのは、義元の文弱か？  
それとも氏真の凡庸さか？

監修・文 小和田哲男



戦功によって在地領主から  
駿河・遠江の守護に大抜擢！

今川氏の苗字の地は三河国幡豆郡  
今川荘（愛知県西尾市今川町）であ  
る。足利義兼の孫である吉良長氏の  
二男国氏が、鎌倉時代の末期に吉良  
氏から分かれ、今川氏を名乗ったの  
にはじまる。

ただ、一般的には、国氏の子基氏  
を経て、その子範国を今川氏の初代  
と数えている。それは、今川荘にお  
いて僅々3カ村を領有するにすぎな  
かった小規模在地領主が、範国の代  
にいたり、駿河・遠江2カ国の守護  
にのしあがったからである。

範国の時代、ちょうど南北朝内乱  
で、範国は3人の兄、すなわち頼国・

範満・三郎とともに戦場に出て、3  
人の兄が戦死してしまい、一人生き  
残った範国に対し、足利尊氏が駿河・  
遠江2カ国の守護職を与えたのであ  
る。なお、範国はそののち、幕府の  
引付衆のトップである引付頭人にも  
任ぜられている。

範国のあとを子範氏がついだ。2  
代目である。この範氏の弟が貞世で、  
出家後の了俊の名で知られている  
が、一時、遠江守護になったり、駿  
河半国守護になり、応安4年（13  
71）からは、何と25年の長きにわ  
たり九州探題という要職について  
いる。ただし、この了俊系今川氏は、  
のち、遠江今川氏として続いたが、  
今川氏から堀越氏となっている。

範氏は父範国に先立って没し、範  
氏のもつていた駿河守護職は、その  
まま範氏の嫡男氏家に相続された。

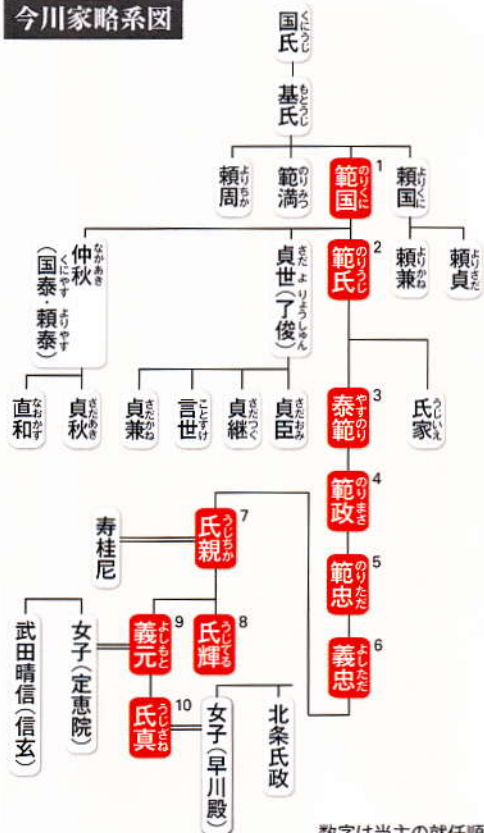
ところが、その氏家が早世し、結局、  
範氏の二男泰範が3代目を継ぎ、4  
代範政のとき、後継をめぐって内訌  
がおきている。範政は末子の千代秋  
丸への相続を申請していたが、將軍  
義教は、千代秋丸の母が扇谷上杉氏  
定の娘で、今川氏が関東の鎌倉公方  
寄りになることを警戒して許可しな  
かったのである。駿河が、鎌倉府の

管轄下である伊豆と甲斐に境を接し  
ていたからである。

5代目は範政の長男範忠が継いで  
いる。この範忠のとき、永享の乱で  
軍功があり、今州という苗字は今川  
氏の嫡流家だけが名乗ってよいとい  
う、いわゆる「天下一苗字」の恩賞  
があった。このときから、今川一門  
は、自分の住んでいるところを苗字  
としているのである。堀越氏・瀬名  
氏・小鹿氏などが誕生している。範  
忠の跡を義忠が継いだ。が、ちょうど  
応仁・文明の乱にあたり、義忠は東  
軍細川勝元方となり、一度上洛した  
が、西軍斯波氏となった遠江に攻め  
入るため、駿河にもどり、横地氏お  
よび勝間田氏と戦っている最中の文  
明8年（1476）4月、遠江の塩  
買坂で、横地・勝間田氏の残党によ  
って討たれてしまった。

義忠の子龍王丸はまだ6歳と幼か  
ったので、一族の小鹿新五郎範満が  
家督代行となった。ところが、龍王  
丸が17歳になっても、範満が家督を  
もどそうとしなかった。龍王丸  
の母（義忠未亡人・北川殿）が弟の  
伊勢新九郎盛時（北条早雲）と連絡  
をとり、伊勢新九郎が同志を集め、  
長享元年（1487）、駿府今川館

## 今川家略系図



数字は当主の就任順

始祖である国氏が居住していた三河国今川庄の土地名をとり、今川と名乗る。初代範国の代、足利尊氏方として各地で戦功をあげ、一躍駿河・遠江の守護に任命された。

## 桶狭間合戦における今川義元を描いた錦絵

今川軍本陣に奇襲をかけた織田方将兵と防戦する今川義元が描かれている。この戦いで義元は討たれ、今川家の没落がはじまる。個人蔵



## 桶狭間古戦場跡の石碑

桶狭間合戦の古戦場跡とされる愛知県豊明市栄町に建てられた石碑。この戦いは、敵島の戦い、河越夜戦とともに、日本三大奇襲戦と称された。



に範満を急襲し、家督を龍王丸に取れりもどした。この龍王丸が元服して氏親を名乗る。今川氏7代目である。この氏親のとき、叔父にあたる伊勢新九郎の援助を得て、領国を駿河から遠江にまで広げている。また、検地を施行し、分国法「今川版目録」を制定し、戦国大名としての歩みをはじめている。氏親死後、子氏輝が跡を継いだ。14歳と若く、しかも病弱だったため、氏親未亡人寿桂尼が「女戦国大名」



## 今川義元木像

京文化に傾倒した貴族体質の強い武将と語られることが多いが、「海道一の弓取り」の異名をとるなど、軍事面でも活躍。臨濟寺所蔵

## 家督相続をめぐる争いを制し、全盛期をもたらしした今川義元

として一時、今川領を支配することもあった。天文5年(1536)3月17日、その氏輝が24歳の若さで急死した。子どもがいなかったため、弟の中から家督を出すことになり、このとき、僧籍にあった玄広恵探と梅岳承芳の2人が名乗りをあげ、兄弟の家督争いとなった。これを花蔵の乱とよんでいる。勝ったのが梅岳承芳で、還俗し、將軍義輝から義の一字を与えられ、義元と名乗った。義元は自分の養育者でもあった太原崇孚、すなわち雪斎を軍師に迎えている。この雪斎の奔走により、甲斐の武田信玄、相模の北条氏康と同盟を結び、「甲相駿三国同盟」が成立した。義元はこの同盟によって後方は安全とみて、遠江から三河へ侵攻し、三河からさらに西、尾張へも攻めこんでいくことになった。永禄3年(1560)5月、義元は2万5000の大軍を率いて駿府今川館を出陣していった。ところが、19日、桶狭間で昼食休憩中に織田信長2000の軍勢の奇襲攻撃を受け、信長の家臣毛利新助に首を取られてしまった。これによって今川氏の衰退がはじまるのである。